

ご注文はイズミンですか？

WHF

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故か木組みと石畳の街で生活することになった小宮泉（こみやいずみ）こと、イズミン。

彼はこの街に住む五人の少女と日常を過ごす。

そして、彼の従兄妹とその友達も加わって!?

——— 彼らの日々はキラキラもふもふと輝く

7 / 16 お気に入り数10人突破！ありがとうございます。あらすじ編集しました

9 / 22 お気に入り数20人突破！ありがとうございます。

11 / 24 お気に入り数30人突破！ありがとうございます。

3 / 13 UA数5000突破！本当に感謝です。これからも頑張ります

目次

第一章 木組みの街のイズミン

第一話 ラビットハウスでバイトで

すか? | 1

第二話 イズミンと下着姿の女の子で

すか? | 6

第三話 イズミンは金髪好きですか?

第四話 パン作りに挑戦ですか? | 12

第五話 続 パン作りに挑戦ですか?

第六話 イズミンと甘兎庵と喋るウサ

17 | 21

第七話 イズミンの設定紹介 + α です

ギですけど? | 26

第八話 シャロとカップ選びですか?

よ? | 34

第九話 アイツとの再会 (アイツって

誰ですか?) | 42

第十話 みんなでお泊まりですか?

58 | 51

第十一話 続 みんなでお泊まりです

か?

番外編 一 今日にはシャロの誕生日で

すか? | 63

69 | 69

第二章 イズミン、帰省します

第十二話 ただいまの前の — 77

122 第二十話 友達の友達は友達になる

第十三話 続 ただいまの前の

126 第二十一話 続 友達の友達は友達

82

第十四話 ただいま — 88

になる — 132

第十五話 ただいま の後の — 98

137 第二十二話 ゴールデンラビッツ

第十六話 続 ただいまの後の

105

第十七話 木組みの街からの来訪者

前日 — 110

第十八話 続 木組みの街からの来訪

者 前日 — 116

第十九話 木組みの街からの来訪者

第一章 木組みの街のイズミン

第一話 ラビットハウスでバイトですか？

「いやーしつかし綺麗な街だな」

俺は歩きながらそう呟いた。確かに、綺麗な街だ。木組みの家と石畳が彼の視界に広がっていた。

西洋風の街並みでとても此処が日本だとは思えない。とにかく、素敵な街だ。

俺は今日からこの街で暮らすことになった。本来ならば従兄妹のあいつと同じ学校に通うはずだったのだが、何故か俺はこの街へ来る羽目になってしまった。はあ・・・まあいいさ。この街でまた素敵な出会いがある事を信じよう。

「さーて、下宿先の香風さん家って何処だよ、マジで。」

（かれこれ歩いて三時間、もうそろそろ着いてもいい頃だと思っただがなあ。まあ良いさ。にしても地図ぐらいくれたって良いじゃねえか、タカヒロさん。）

愚痴りながら歩いていると、彼はとある喫茶店を見つけた。名前は

「ラビットハウス？」

うさぎでも居んのか？」（因みに俺はうさぎ大好き、つて誰

に喋ってんだ俺?)

早速中に入った。キョロキョロ辺りを見回す。しかし、しかし……………

「ウサギがない!!!」

誰かとセリフが被った。声の方に向くと茶髪の女の子がしゃがんだまま上目遣いでこちらの方を見ていた。周りにはお客さんの姿はいない。

すると、頭に何か乗せた店員さんが俺と茶髪の少女を見て、

「うさぎならいますよ。」と言った。

その時、今まで俺の中で渦巻いていた疑問が一つに繋がった。

一つ、ラビットハウスという店名なのに何故かいないうさぎ

二つ、店員さんの頭に乗っている不思議な物体

三つ、店員さんの「うさぎならいますよ。」という言葉

もしや……

「あゝ」

「はい、何でしょうか。」

「その頭に乗ってるのって・・・うさぎ？」

「よく分かりましたね、これはアンゴラウサギという品種で名前はティツピーと言います。」

ウサギなのか？これ。どう見てももふもふしたクッションにしか……

いやまあそんな事はどうでも良い。

「それよりご注文はどうしますか？」

やべつウサギが目的で中に入った何て言えない……

「じゃあこの店のオススメを」

適当にやり過ぎす事にした。(申し訳ないが)

「かしこまりました。それで、貴女は何にしますか？」

「じゃあそのうさぎさん！」「非売品です。」

返し早っ!!

「せめてもふもふさせて〜」

「一杯につき一回です。」

「じゃあ三杯！」「かしこまりました。」

おお、商売上手だなあの店員。

そのあと彼女らがコーヒーの銘柄当てや、ティツピーをモフモフしているのを自分が

頼んだコーヒーを飲みながら見ていると茶髪の少女が

「私、ココアっていうんだけどここら辺で

香風

って家知らない？」

なんだって!!

「君も香風さん家を探しているのか？」

「うん、そうだよ。」

ラッキーだ。こんな偶然ってあるもんなんだな。

そして、偶然がもう一つ。

「香風はうちですが。」「えっ」「

「もはや偶然を通り越して運命だよ。」

「ああ、あなたの言う通りだ。」

「あんたじゃなくてココアでいいよ。」

「そうか、ならココア。今日からよろしくな！」

「うん、よろしく！ えーと…」

そっういえば俺の自己紹介がまだだったな。

「俺の名前は小宮泉（こみやいずみ）だ。」

「じゃあイズミンだね。よろしく、イズミン！」

「すみません、もしかして今日からここで働くイズミさんでしたか？」

店員の女の子が俺に話しかけてきた。

「おう、そうだけど」

「父から話は聞いています。私の名前は香風チノです。これからよろしくお願いします、イズミさん。」

「うん、よろしく。」

「へえ、チノちゃんって言うんだ。ちなみに私もここで働くことになってるから、よろしくね♪」

「はい、よろしくお願いします。」

こうして、俺と彼女達の新しい生活が始まった。

第二話 イズミンと下着姿の女の子ですか？

「では、イズミさんとココアさんには早速働いてもらいます。」

チノちゃんは俺らにそう言ってきた。あれ？他に従業員は？

「あのさ」「はい、なんででしょう」

「今この店チノちゃん以外誰もいないの？」

「いえ、父とバイトの子がもう一人……」

「私をお姉ちゃんだと思って頼ってね！」

あ、ココア早とちりしたな。

「じゃあココアさん仕事してください」

「お姉ちゃんって呼んで」

「ココアさん」「お姉ちゃんって呼んで」

「ココアさん」「お姉ちゃんって呼んで」

「ココアさん」「お姉ちゃんって呼んで」

このやりとりを数回繰り返したのち、やっとココアが諦めた。そんなにチノちゃんを妹にしたいのか。それとも誰かのお姉ちゃんになりたいのか。

両方な気もしてきた：

「とりあえず二人共制服に着替えてください。更衣室はあちらです。」

「分かった。すぐに着替えてくるよ」

チノちゃんに言われて着替えてくる事にした。制服ってどんななんだろう。

「おつ、バーテン服じゃん！」

良い感じのバーテン服だ。うん、悪くない。

鏡を見ながら自分の制服姿に酔いしれていると

「キヤアアア……！」

この声、ココアか！しかも女子更衣室の方からだ。何があつたんだろうか。

もしかしたら危ない目に会っているかもしれない。

俺はすぐに駆けつけた。

「大丈夫かー！ココア」

しかし、俺の目に広がっていたのは信じられない光景だった。

ココアが紫髪のツインテールの少女に銃を向けられていたのだ。

しかも銃を向けている少女は 下着姿 だったのだ。

すると、銃を持った少女がこちらに気づいた。途端に、顔を真っ赤にした。どうやら

自分の今の状況を理解しようだ。

「えつと・・・どうしたの？」

冷静に問いかけた。

「・・・見るな」

「えつ」

「こつちを見るなああああああ!!」

言い終わると同時に俺は少女のパンチをもろに顔面にくらった。

「グボアツツ・・・」

なんか変な声出ちやった。

良いパンチだったぜ、嬢ちゃん……

俺の記憶は一旦そこで途切れた。

「イズミン、イズミン！」

ん？誰かが俺を呼んでいるような……

「イズミン、イズミン！」

「・・・っ！」

俺は目を覚めました。どうやらここはベッドの上でさっきの声の主はココアだったようだ。

どうやら30分の間、俺は寝ていたらしい。丁度帰ってきたタカヒロさんと、ツイン

テールの子で俺をここまで運んで来てくれたそうだな。

しかしパンチといい、俺を（タカヒロさんと一緒にだが）運んでくれたといい怪力だなああの子は。

「良かったあ、イズミンもう目を覚まさないのかと思っちゃったよ〜」

笑顔でココアはそう言った。本当に俺の事を心配してくれてありがたい。

「いや、流石にパンチ一発では死なないよ。」

結構良かったが。

すると、紫髪のツインテールの子が部屋に入ってきた。

「さつきはすまなかった。いきなり殴ってしまつて」

謝りに来てくれたようだ。別に良いよ、大丈夫。と返す。

「私は天々座理世、リゼとでも呼んでくれ。よろしくな」

「俺は小宮泉。ココアからはイズミンって呼ばれてるけど……」

「いついや、いきなり男の子をあだ名で呼ぶのは……その……／＼」

どうしたリゼ、顔が赤いぞ。

「ああ、ならイズミで良いよ。」

「そ、そうか。ならイズミ、これからよろしくな」

「おう、よろしく リゼ。」

二人はガツチリ握手をした。

こうして、ラビットハウスでの仕事が始まった。

まずは、コーヒー豆を運んだ。大きい袋はかなり重かったがリゼは軽々と持っていた。どこにそんな力があるんだよ。

次にラテアート。リゼの作ったものはメチャメチャ上手かった。チノちゃんのは斬新で、ココアの作ったうさぎの絵はとても可愛かった。俺？全然出来ませんでした。他にも接客や料理などの飲食業の全ての仕事を行った。

辺りはすつかり暗くなっていた。

「皆さんお疲れ様です。もう上がって良いですよ」

チノちゃんの一言で俺は肩の力を抜いた。今日は初めての事ばかりでいろいろな疲れ、早く寝たい。

私服に着替えて戻って来ると三人が待っていた。

「ねえ、イズミン。この四人でメアド交換しない？」

衝撃だった。

「マジで？良いの？」

「良いよ♪」「良いですよ」「ああ、いいぞ」

こんなに嬉しいことは無い。三人の女子とメアド交換するなんて、神よ
感謝しま
す!!!

とまあココア、チノちゃん、リゼとメアド交換した。

リゼが帰った後は、二人と一緒に夕飯を作って食べた。

その日はシチューだった。今まで食った夕飯の中で一番美味かった。

第三話 イズミンは金髪好きですか？

「行つて来ます。」「行つてきまゝす♪」

今日から新学期。ココアとチノちゃんは学校に行くそうだ。

「あれ？イズミンは学校行かないの？」ココアが俺に聞いてきた。

「ああ、俺は通信制の学校だから。」

上でも言った通り俺は通信制の高校に行っている。何故かこちら辺は女子校しか無く、遠くの学校に行く気力もないためそこにした。自分だけ特例で女子校に行くわけにもいかなからな。現実には厳しい。

「そつか。じゃあ行つて来るね。」

「気をつけるよー」「はーい」

ココアとチノちゃんを見送った。さて、俺も学校行くか。俺は自室に戻る事にした。はあ、普通に高校生活を送りたかつたな。もしこの街に来てなかつたら従兄妹のアイツやその友達たちと一緒にの学校だったかもな。

俺はそう思いながら自室のドアを閉めた。

「さて、学校終わったー」

初日は意外と早めに終わった。結構時間がある。今日はバイトも休みだし、ココア達もまだ帰っていないようだ。

「散歩にでも行くか」

柄にもない事言いながら俺はラビットハウスを飛び出した。

しかし、こうやって街を歩くのは初めてな気がする。よく考えたら俺この街の事知らねえじゃん。ま、いつか。適当にブラブラ歩いてよーっと。

すると、俺はある店を見つけた。店の名前は、

「甘　　兎　　　　庵　　？」

俺の見つけたのは甘兎庵という和のテイストの店だった。丁度小腹も空いていたので、立ち寄ることにした。

「いらつしやいませ」

店の扉を開けると緑の着物を着た可愛い店員さんが出迎えてくれた。誘導され席に座る。

さつきの子は看板娘かな？

そんなことを考えながらメニュー表を開くと、な

んだか訳の分からないメニューがびつしり書かれていた。煌めく三宝珠？

海

に映る月と星々？

なんじゃこりや。

「ご注文決まりましたか？」

そうこうしている内に、さつきの店員が来た。

「じゃあ、金の鮭スペシャルで。」

「かしこまりました。」

なんかすごいものを頼んでしまった気がする。そして俺はたい焼きを鮭に見立てたその料理に驚くのだった。

なんとか食べ終えた後にさつきの可愛い店員さんが俺に話しかけてきた。

「どう？うちのオススメは。」

「たい焼きを鯪に見立てるのは無理がある気がするけど、味は文句無しに美味しかった。」

「そう、良かったわ。私宇治抹茶千夜っていうの。千夜って呼んでね。」

「俺は小宮泉。イズミとでも呼んでくれ。」

「イズミくんか、よろしくね。」「ああ、よろしく。」

そんなわけで千夜と他愛のない話をしてっていると、入り口の扉が勢いよく開いた。

「千夜ー。あんた昨日貸したノート持つてる？」

扉の方には金髪でウェーブのかかった髪をした女の子が立っていた。俺は数秒間か、見惚れていた。

その美しい金髪に。

「ああ、昨日のノートね。すぐ返すわ。」

「千夜。あの金髪少女は一体誰だ。」

「シャロちゃんのこと？なんなら紹介してあげようか。」

「是非、おねがいます。」

千夜がなんか不敵な笑みを浮かべていたが気にしない。

「シャロちやーん。紹介したい人がいるの。こちら小宮泉くん、私の新しい友達よ。」

「そしてイズミくん、こちらシャロちやん。私の昔からの幼馴染よ。」

「ふーん。そうなの。まあ、よろしくね、イズミ。」

「お、おう。よろしく。」

俺がそう言うのと彼女は駆け足で何処かへ行ってしまった。

シャロが行った後、千夜が話しかけてきた。

「イズミくん、シャロちやんに気があるの？」

「いや、彼女綺麗な金髪してんなーって思ってる。」

千夜がえっそこなの？って顔してた。ええ、そこなんです。従兄妹の影響で、俺は外人及び金髪が大好きなんです。

「じゃあな、また来るよ。」

「ええ、待ってるわ。」

こうして俺は甘兎庵を後にした。

第四話 パン作りに挑戦ですか？

今日もラビットハウスでバイト。店にはいつもの四人が揃っていた。さつきまでいた客も引いていき、落ち着いてきた所でココアが切り出した。

「ラビットハウスに新メニューを作らない？」

「新メニュー ですか？」

チノちゃんが問い直す。

「そう、新メニューだよ！」

改めて元気に答えるココア。新メニューか。何を作るんだろう

「新メニューって何を作るんだ？」

「それ、俺も気になってたんだ。何を作ろうと思ってるの？」

リゼさんナイス！俺の心を読み取ったかのような質問だ。

「パンを作ろうと思つて、うち実家がパン屋さんだから。」

「へえ、実家がパン屋ねえ。ココア、パン作るのが得意なの？」

「そうだよ。じゃあ今度の休日にラビットハウスで作らない？」

「おっ良いっすなー。リゼも来るよなあ？」

「ああ、もちろんだ。」良い返事が返ってきた。リゼにしては珍しく気合い入ってんな。「なんか今失礼な事考えなかつたか？」チャキ

「イエイエベツニナニモー」

怖っ!!なんで俺の考えてる事が分かるんだ？まさか本当に俺の心が読めるんじゃない・・・つてか銃！早く仕舞ってくだせえ。まだ仕事ですよお！

「そつそれより、パンを作るならオーブンが必要だよね。この店に有るの？」

「オーブンならありますよ。昔、おじいちゃんが調子に乗って買ったやつが。」

チノちゃんが答えた。ていうかあるんだ。

「じゃあみんな、休日楽しんでみてね♪」笑顔でそう言うココア。

まあココアが一番楽しみにしてそうだけどな。俺はそう思いながら仕事を再開した。

そして、休日　パン作りの日がやって来た。パンに入れる材料を持って一階の厨房の方へ行くとそこには千夜の姿があった。

「千夜!」「イズミくん!」二人は揃って声をあげた。

「あれー?イズミン、千夜ちゃんと知り合いだったの?」

「ああ、ついこの前な。」

「そうだったんだ。まあ、リゼちゃんとチノちゃんは初めましてだろうし紹介するね。こちら千夜ちゃんだよ。」

「初めまして、宇治松千夜です。今日はよろしくね。」

「私はチノです。今日はよろしくお願いします。」

「リゼだ。今日はよろしくな。」

「さーて、軽い自己紹介も済んだところでパン作り始めましょうやあ！」

「「「おー!!」」」

「こうして、パン作りが始まった。」

「じゃあまずは、各自パンに入りたい材料提出ー！ 私は新規開拓に焼きそばパンならぬ焼きうどんパンをつくるよー！」

「私は自家製あずきと、海苔と梅を持ってきたわ。」

「冷蔵庫にイクラと鮭と納豆とゴマ豆腐がありました。」

「俺はチョコレートと煮干しとポテトチップ持ってきたぞ。」

みんなそれぞれ様々な食材を持って来ていた。おっリゼはいちごジャムとマーマレードか。なんかさつきから

リゼ固まってるけど・・・どうしたんだろう、考え事か？

「なあ、イズミ　これってパン作りだよな？」リゼが小声で聞いてきた。

「そうだけど？」

俺がそう返すとリゼは　そうだよな・・・　と言って、また考え事をしていた。今日はどうしたんだ？リゼ。俺にはさっぱり分からなかった。

第五話 続 パン作りに挑戦ですか？

「パンをこねるのって時間がかかるんですね。」

チノちゃんがそう呟く。確かにさつきからずとこねてるもんな。俺も少し疲れてきた。

「腕が・・・もう動かない・・・」千夜が力無い声でそう言う。っていうかもうそんなにバテたのかよ。

「大丈夫か千夜。無理すんなよ。」「ええ、分かったわ。」

「チノちゃんも辛かったら、言ってみてね。」「子供じゃないです。」

チノちゃんは頬を膨らませて俺に言った。子供扱いされたのが嫌だったのかな？まあでも二人がまた疲れてたら代わってやらないとな。

「まあリゼは平気だろうな。」

俺はリゼの方を見た。リゼは何食わぬ顔でパンをこねていた。と、リゼはこちらに気づき

「なぜ決めつけた？」そう言って俺を睨んだ。おー怖っ。

だってリゼ俺より力あるじゃん。この前リゼと腕相撲したけど俺三秒で負けたから

ね・・・

まあそんな事はどうでもいい。

ココアの方は大丈夫だろうか。そう思いココアの方を向くと

「このときのパンがもちもちしててすごくカワイイんだよ！」

ココアがパン生地を持ちながら笑顔で言った。なんか謎のオーラ出てるし！ 凄い愛だな。

多分この二人は心配しなくていいだろう。俺もさつきとこねないとな。

「よし、まあこんなもんだろ。」パンの生地をいい感じのところどこね終え、俺はそう言った。

パンの形はエツフェル塔だ。なんでかかって？ イギリスっぽいからかな。ん？ エツフェル塔はフランスにあるって？ まあ細げえ事はいいんだよ。

みんなもそろそろ終わるみたいだ。みんなはどんなの作っただろう。まずはチノちゃんにでもきいてみるか。

「チノちゃんはどうな形のパンにするの？」

「おじいちゃんです。小さな頃から遊んで貰っていたので」

「おじいちゃん子だったんだな。」

「はい、コーヒーをいれる姿はとても尊敬していました。」

そうだったんだ。チノちゃんのおじいちゃんのコffee飲んでみたかったな

「リゼは何の形にした？」

「私はうさぎの形だ。中々いいだろ。」

ほう、うさぎか。つてかめちやめちやカワイイ!!

「ああ、良いな。すごくカワイイ!!」 俺は変にテンションが上がった。

「そ、そうか・・・／＼」

急にリゼが黙り込んでしまった。顔が少し赤くなってる。褒められたのがそんなに嬉しかったのか？

あ、余ったパン生地で凱旋門も作ろうかな。

そして、俺は凱旋門の形のパンを作った。時間もそんなに無かったから焦って作っ

た。

「じゃあみんなーそろそろオーブン入れるよー」

ココアが言った。俺も　おう、と返す。オーブンでパンを焼くとき、チノちゃんが「今からおじいちゃんを焼きます。」って言うって怖かった。ティツピービビってたし。

その後チノちゃんはずっとオーブンを見た。

「パンを見ててそんなに楽しいか？」

「はい、どんどんふくらんで大きくなってます。」

チノちゃんは楽しそうだった。

「でもイズミさんのパンは全然ふくらんでないです。イズミさん、もっとがんばってください。」

チノちゃんは俺にそう言った。いや、何をどう頑張ればいいんだ？

どうすればいいか分からなかった俺は仕方なくオーブンの前でガンバレ、と応援していた。何やってんだ、俺。

「パン、焼けたよー！」

おっ焼けたか。ん〜パンのいい匂い！

「早速みんなで食べましょう。」

みんなそれぞれ自分のパンを一口食べた。

「美味しい！」「いけますね」「おっ美味しい。」「これなら看板メニューにできるね！」

「この、焼きうどんパン」

「この、梅干しパン」

「この、いくらパン」

「この、煮干しパン」

「どれも食欲そそらないぞ。」

リゼから冷たい一言が入った。良いと思っただのになー。煮干しパン。

その後ココアが作ったティップーパンがもちもちしてて好評だった。中身はいちごジャムでちょっとエグかったけど。俺は煮干しパンもラビットハウスに出してくれと頼んだけど、リゼに却下された。

第六話 イズミンと甘兔庵と喋るウサギですけど？

朝だ。イズミは目を覚ました。

(まだ眠い、でも腹も減った。朝メシ食べよー)

一階に降りた。朝食はすでに用意されていてそこにはチノちゃんもいた。

「おはよう、チノちゃん。いつも早いね。」

「おはようございませすイズミさん。」

チノちゃんは丁寧に挨拶を返してくれた。ホントええ子や。

「そういえば今日は甘兔庵に行くんだよね。」

「はい、千夜さんがパン作りのお礼にとの事で。」

甘兔庵、和の趣がある良い店だったな。この前食った金の鯨スペシャルは良かった。

今度は違うやつ頼もー

そんなことを思いふけてるとチノちゃんから 早く食べてください と急かされた。

よく見たら俺は朝食に全く手をつけて無かった。やべえ、冷めちゃう。

二人が朝食を食べ終わると、誰かが階段を下りてくる音がした。

「ふわあくチノちゃんイズミンおはよう。」「おおココアおはよう」

（今日は一人で起きて偉いなココア．．．って遅えよ！）

イズミは心の中でツッコんだ。

「ココアさんもつと早く起きてください。」

チノちゃんが注意する。微笑ましいわ、この光景。

という訳で彼らは今千夜の家、甘兔庵に向かっているところだ。

チノちゃんの話によると、おじいちゃんの時代に張り合っていたらしい。何故かティツピーの表情が強張ってたけど．．．まあいつか。

甘兔庵に着いた。

「オレ、うさぎ、あまい．．．」

「ココア、甘兔庵な。」

ココアが訳が分からなそうに看板の文字を左から一文字ずつ読んでいた。すかさずイズミが訂正する。

「あ、いらっしやいみんな。来てくれたのね。」

店の扉を開けると千夜が初めて会った時と同じ制服姿で出迎えてくれた。

「あつ初めて会った時もその服だったね。制服だったんだ！」

「あれはお仕事で羊羹をお得意様に配った帰りだったの。」

「あの羊羹美味しくって三本いけちゃったよー」

「三本丸ごと食ったのか!」リゼは驚きつつツッコんだ。

「バカな・・・俺でも二本がやっとなのに・・・」

「イズミさん、どうしたんです?」

どうやら一番衝撃を受けてたのは彼のようだ。チノちゃんの言葉で我に帰る。

「あ、ウサギだ!」

「看板ウサギのあんこよ」

ココア達の方を見ると、毛色の黒いうさぎが台の上にちよこんと座っていた。つぶら

な瞳と小さな口が可愛らしいウサギだ。あれ?でも・・・

「千夜、前来たときこのうさぎいたか?」

「イズミくんが来てた時は丁度いなかったのよ」

「そうだったのか」（なんて間の悪い…）

イズミはあんこを撫でながらそう思った。初対面のイズミに撫でられても動じない辺り、あんこはかなり人間慣れしているようだ。

が、チノちゃんが触ろうとして近づくと、あんこが急に飛びついてきた。あんこはチノちゃんの頭のティッピーに体当たりした。

「チノちゃん大丈夫？」 「びっくりしました」

ココアが反動で尻餅をついたチノちゃんに近寄る。怪我はしてないようだ

「縄張り意識が働いたのか？」

「いえ、あれは一目惚れしちゃったのね。」

「一目惚れ？」

「恥ずかしがり屋くんだったのにあれは本気ね。」

千夜は嬉しそうに言った。あれ？あんこがオスってことは

「なあ、チノちゃん。ティッピーってメスなの？」

「はい、ティッピーはメスですよ。」

そう言ったチノちゃんの後ろではティッピーの逃走劇が繰り広げられていた。その時のティッピーの声は、

どうみてもおっさんの声だった。

「チノちゃん、もしかしてだけどティッピーの　中身　はおっさんだったりして？」
俺はちよつと冗談つぼく言ってみた。

チノちゃんはちよつと驚いて

「・・・イズミさんは勘が鋭いですね。分かりました、後で全てを話します。」　と言っ
た。

それを聞いて俺はさつきの子ノちゃんより驚いた。

（ん？え？どゆ事？まさか本当に中身違うの？いやいやいやそんなのないよありえ
ないって。

でもさつきの意味深な発言は？）

「イズミくん。どうしたの？」

「ん？あついや何でもないよ。」

ココアが考え込む俺をみて心配そうに言った。俺は一拍遅れて返事を返した。

「私お腹すいちゃったよー。何か頼もう」「おう」

二人は席に着いた。

「みんなどうだった？初めての甘兎庵は。」

甘兎庵からの帰り、イズミは三人に聞いた。

「いろんなメニニューがあつて目移りしちゃったよー。」

「メニニュー名は個性的なのばっかだったけどな。」

リゼが言う。確かに俺も初めてみた時は面食らった。

「千夜さんの抹茶のラテアートはすごかったです。」

ラテの中に俳句書いてあつたもんな。季語が無かつたけど

「でもチノ、昔はあの店とライバルだったんだよな。」

「はい。今はそんなこと関係無いですけどね。」

リゼの問いにチノちゃんはそう答えた。

そうだよな、平和が一番だ。いがみあわずに仲良くやっていければいいだろう。

ま、俺達もラビットハウスで頑張らないとn

・・・あ。

俺は重大な事に気付いた。チノちゃんの頭に乗ってるのティップピーじゃなくてあん

こだ。

「チノちゃん、頭に乗ってるそれ、あんこだぞ。」

「「あ！本当！」だ！」です！」

三人は揃って声をあげた。ていうか今まで誰も気づいて無かったのかよ！

「じゃあねえ、みんな先行ってる。俺はティツピーとあんこ取り替えて来るから。」

そう言っつて俺はあんこを抱えて甘兔庵に向かつて走った。

（はあ、はあ、やっと着いた・・・）

甘兔庵に到着したイズミ。

「おーい。千夜ー」

「あら、どうしたのイズミ君。」

千夜は丁度店の片付けをしていたところだった。

「いや、ティツピーとあんこ入れかわってないか？今俺の手元にあんこがあるんだが」

「あら、台の上に毛玉・・・全然気づかなかったわ」

千夜、お前もか。というかティツピーを毛玉で。

第七話 イズミンの設定紹介＋αですよ？

小宮 泉（コミヤ イズミ）

年齢 15歳 高校一年生

身長 159cm （結構低め リゼと同じくらい）

体重 45kg

誕生日 1月30日 （特に意味はない）

髪型 黒髪のショート

勉強 かなりできない。しかし一つだけ得意な教科がある

運動 全然ダメ だが体を動かすことやスポーツは好き

好きなモノ 外国 金髪 ウサギ

嫌いなモノ ネズミ（ドラ○もんか）

頭は悪くバカだが真面目で明るく優しい性格。あまり怒らない

服装は基本的にジャージで黒色の同じものを五つ持っている

味覚に関して若干難有り

原因は不明で、どう考えても美味しくならない食材を組み合わせるは周りを混乱させる

趣味はゲーム

特技はカメラと誰とでも仲良くなれること

この特技のおかげで男女共に友達が多いが彼女はできたことがない

呼び方

ココア↓ココア

チノ↓チノちゃん

リゼ↓リゼ

千夜↓千夜

シャロ↓シャロ

タカヒロ↓タカヒロさん

呼ばれ方

ココア↓イズミン

チノ↓イズミさん

千夜、タカヒロ↓イズミくん
他↓イズミ

はい、以上です。

この後は甘兎庵から帰ってきた後の話をします

それではどうぞ

甘兎庵に行った日の夜のこと

「イズミ君、君はティツピーの秘密を知ってしまったようだね。」

「は、はい・・・」

イズミは力なく答えた。

今彼はチノちゃんの家（チノちゃん タカヒロさん ティツピー）とラビットハウスにて会議中である。いつもならばバーの時間で店を開いているのだが今日は早めに閉じてもらった。

その申し訳なきもあってかイズミは元気がなかった。

「まあ気にする事はない。そう大したことじゃないから」

（いや、大したことですよ）イズミは心の中でツツコンだ。

「にしてもティツピーはなんで喋れるんですか？」

「それは「おじいちゃんがティツピーの中に入ってるんです」

チノちゃんがタカヒロさんが言うより先にそう言った。

「ティツピーの中におじいちゃんが？」「そうじゃよ小僧」

イズミの問いにはティツピー改めチノちゃんのおじいさんが答えた。それより小僧呼ばわり止めい。

「チノちゃんのおじいさんの魂がティツピーに憑依したってことか。」

「「そうなるのお」なるね」なりますね」

うわ、息ピツタリや さすが家族。

「さて、まあこんな感じだよイズミ君。ただ、この事は誰にも言わないで欲しい。」

「ココアやりぜにも内緒ですか。」

「知ってる人は少ない方がいいからね」

（やっぱウサギが喋るのは絵的に不気味なのかな、俺は全然アリだが。それよりも…）

この事実を知る前にティツピーをモフモフしたかった!!!

中身がジジイだとモフモフする気にならねえ…

「どうしたんだイズミ君」

「はっ！いえ、なんでもありません。」

「取り敢えず夜も遅いから、二人共もう寝なさい。」

時計の針は一時をさしていた。もうこんな時間か。

「分かりました、おやすみなさい。」

俺とチノちゃんは二階に上がった。

それから少し後のこと

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おいタカヒロ。」「なんだい親父」

「あのイズミという小僧、お前さんとどうやって知りあつた？」

「昔、彼の父親と友達になつた。戦場でな」

イズミ君の父は戦場カメラマンだった。この現状を世界に伝えるのが俺の仕事だ、と彼はよく言つてたな。

陽気だったが仕事に対しては立派な意思を持つていたいい奴だった。

でも、アイツ死んじまつた。銃撃戦に巻き込まれて。

駆け寄つた俺にアイツはこう言つたんだ。

息子をよろしく、と。

アイツの持ち物の中にはイズミ君に関わるものもいくつかあった。

そしてイズミ君をこの街に呼んだんだ。頼まれたからね」

「それまではどうしてたんじゃ。」

「アイツの妹だ。アイツが死んだ後、イズミ君の母親も病気で亡くなってしまった。

身寄りのなくなつたイズミ君をアイツの妹が引き取つたのさ。」

「あの小僧にそんな過去があつたとは……」

「今ではあんなに明るい親を両方もなくしてるんだ。心の傷も大きいだろう。

だから、

彼には幸せになつて欲しいんだ

第八話 シヤロとカップ選びですか？

「わーかわいいカップがいっぱいー！」

ココアが嬉しそうにそう言った。確かにそこには沢山のカップがズラリと並んでいた。

今、イズミたちは喫茶店ラビットハウスで使うカップを買いに来たところだ。

と言つても、別にカップに困っているということも無いのだが

じゃあなぜ此処に来たかと言うと――

「このお店のカップって無地だよね」

これもまたココアの一言からだつた。

「シンプル イズ ベストです」 チノちゃんがそう答える。なんか大人っぽいな

「ん〜でも柄があつた方が面白いんじゃないか？うさぎのマークとか」

「・・・なるほど、いいかもしれませんね。」

「そうだよ！もつと色んなのがあつたらきつとみんな楽しいよ！」

おつ、言ってみたら結構乗ってきてくれた。それなら・・・

「じゃあ今度みんなで行こうぜー」

「はい」「うん！」

よし、決まりだな

「そうそう、この前面白いカップ見つけたんだー」

「へえ　どんな」　料理を配り終えたりゼが話に加わってきた。

「んーとねー、こんなの！」

そう言つてココアが浮かび上げたのは、手持ちがちよつと曲がつた感じのかわいいカップだった。

いや待て、それは飲み物を淹れるカップじゃない気がする

「それ、アロマキャンドルじゃないか？」

リゼの冷静なツツコミがはいる。喫茶店にアロマの香りは・・・ないなあ。

とまあ、こういう訳で今に至る。相変わらずココアはテンションが高い。

「ココア、あんまはしゃぐなよー。ここ、割れ物ばつかだか『ゴツ』」

イズミが言い終わる前に何か鈍い音がした。ココアがカップの棚にぶつかった音だ。

(（予想を裏切らない) 全員がそう思った。

棚の上のカップが落ちそうになる。

イズミとチノちゃんで落ちてくるカップをキャッチし、リゼが倒れそうになったココアを支える。一緒に働いてるからかコンビネーションは抜群だった。

「気をつけてください、ココアさん。」「はい」

気を取り直してイズミたちはカップ選びを始めた。

ふーん。カップにもいろいろあるんだなー。おつ、あれなんか良さそう！

イズミはそのカップに手を伸ばす。と、誰かと手が触れあった。

「おつとすいません。ってシャロじゃん。」

「あら、イズミじゃない。どうしたのこんなところで」

さっきの手の主はシャロだった。

「喫茶店のみんなとカップを買いに来たんだよ。」

イズミはココア達を指差してそう言った。

「あれ よくみたらシャロじゃん」

「て、天々座先輩!? どどどどどうしてここに・・・」

シャロはリゼを見て急に動揺しだした。

「知り合いですか?」

「私の学校の後輩だよ。ココア達と同年」

あ、シャロとリゼって同じ学校だったんだ

「リゼ（ちゃん）って年上だったの?」

ココアとセリフが被った。なんかみんなから 今更 って顔されてるんだけど…

「そっそれより二人っていつ知り合ったの?」

「私が暴漢に襲われそうになった所を助けてくれたの」

なにそれリゼめちやめちやカツコイイじゃん!

「『この私が断罪してくれる!』とか言いそう!」

「そんなこと言わないぞ!!」 イズミはリゼに全力で否定された

「ちがうちがう、本当はー」「あつ言っちやダメです!」

そう言っつてリゼは説明した。

どうやらシャロが不良野良うさぎが通行のジヤマして困っている所をリゼが助けた

ようだ。

「うつつさぎが怖くてわっ悪い!？」

シヤロは顔を赤くしながら言った。うさぎカワイイのになー

おつと本来の目的を忘れてた。カップを探さねば

「にしてもどのカップが良いのかサツパリだ」

「そうですね、違いが分かりません」

「どれも同じように見えるよー」

イズミ達は口々に言った。みんなこういう知識はないようだ

「じゃあみんな、このティーカップなんてどう？香りが良く広がるの。」

そう言つてシヤロはティーカップを手に取り勧めてきた。

「へーそうなんだあ。」「カップにも色々あるんですね」

「こつちは取っ手のさわり心地が工夫されてるのよ。」「なるほどねー」

「詳しいんだな」

「上品な紅茶を飲むにはティーカップにもこだわらなきゃです!」

シヤロはリゼに笑顔で言った。

「うちもコーヒーカップには丈夫で良いものを使つてます」

「私のお茶碗は実家から持って来たこだわりの一品だよ」

「俺も修学旅行で作った湯飲みを今でも大切にしてるよ」

「何張り合ってるんだ。あとイズミ、お前のはそれほど愛着ないだろ」

チツ バレたか。俺もこだわりが欲しかったんだよ……

「でもうちの店コーヒーが主だからカップもコーヒー用じゃないとなー」

「えっそうなんですか!？」（リゼ先輩のバイト先行つてみたかったのに……）

シャロはリゼの一言に一瞬驚き、そして悔しそうな表情を浮かべていた。

「もしかしてコーヒー苦手？ 砂糖とミルクいっぱい入れればおいしいよ」

「につ苦いのが嫌いなわけじゃないわよ!」

ココアに子供扱いされたのが嫌だったのかシャロは力強く訂正した。その後

「ただ、カフェインを摂りすぎると異常なテンションになるみたいなの。自分じゃよく分からないんだけど」

と続けた。

「「「「コーヒー酔い!?!」」」」

（コーヒーで酔うのか、すごい体質だな。シャロがハイテンションになるとこ見て

みたい気もする…)

「イズミ、今変なこと考えなかった?」「ヒヤい!いえ、なにも」

変な声が出てしまった。シャロも俺の考えが読めるのか、恐ろしいな。

この後も、ティップピーがカップの中に入ったり、リゼが昔五万もするアンティークのカップを的にして打ち抜いたことを知って驚愕したり、シャロがリゼと色違いのカップ買ってたりしてみんな楽しんでた。

すると、

「シャロちゃんて高いカップ詳しくてお嬢様って感じだね。」

と、ココアが言った。シャロは「お嬢様!?!」と驚いていたけど、言われてみれば確かにお嬢様っぽい。

チノちゃん曰く、リゼ達の学校にはお嬢様と才女が多いそうだ。

その後少し話した後、イズミ達はシャロと別れた。

結局、喫茶店でつかうカップは買いませんでした。何しに行ったんだか 楽しかつ

たけど

「あら、シャロちゃんお帰りなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの？」 元気のないシャロに千夜が訊く

「リゼ先輩達に余計なイメーヂ持たれた・・・」

「ココアちゃん達に会ったのね！」

「・・・絶対内緒よ」

「なにが？」

「私がおんな家に住んでるっていうことをよーーーーー!!」

シャロの家は甘兎庵の隣のボロい小屋みたいな家だ。

更に言うと、シャロはお嬢様ではない。一般的な庶民である。

イズミ達がこの事実を知るのは後の話

第九話 アイツとの再会（アイツって誰ですか?）

「えーと、にんじん二本とジャガイモ三個と、あとは…」

俺はメモを見ながらそう呟いた。

只今俺はチノちゃんに頼まれて買い出しに行っているところだ。今夜はシチューだからその材料もついでに買ってきてくださいとの事だ。なんかパシリ扱いされてるよ
うな気がする……

「よし、これで全部だな。あ、おいしそうなお菓子！ 買ってこー」

後でチノちゃんに怒られそうな気がするが、大丈夫だろ うん。

「ただいまー。つてあれ? みんな?」

ラビットハウスに帰って来た。が、ココア達の姿が見当たらない。

どうしたんだろう、と思いつながらみんなを探していると、俺はカウンターの上にある

書き置きを見つけた。

「なになに、

イズミンへ

千夜ちゃんと一緒にシャロちゃんのバイト先へ潜入に行きます

お留守番、よろしくね♪

ココア

チノ

リゼ

」

「おい、仕事はどうした。」

誰もいない喫茶店で俺は少し怒りを覚えながらそう言った。

帰って来たら注意しなきゃな

自分だけでも出来る仕事をと、俺は倉庫の整理をしていた。

大体終えたところでふう、と一息つく。

「よし、こんなもんだろ。そろそろカウンターに戻るか。」

．．．．

カウンターに戻ったがまだココア達は帰って来てない。

それどころか、お客もゼロだ。かなり暇である。

その時、カランコロンと店の扉が開く音がした。

入って来たのは女子高生二人。

「あ、いらつしやいませー・・・え?」

俺は拍子抜けた声が出た。なぜなら、

「あら、イズミくんじゃないですか。」

「本当だー! イズミだ! 久しぶりー」

その二人は俺のよく知る人物だったからだ。

「どうしてここに来た、シノ」

「たまたま偶然です。」

俺の問いにシノ——従兄妹の大宮忍は笑顔で答えた。

「イズミくんこそ、高校生になった途端急に居なくなつて。どうしたんですか?」

「うっ　そ、それは・・・」

俺は言葉に詰まった。なぜならこの街に来たのも急な話で、その前まではシノやその

友達たちと同じ学校へ行くつもりだったからだ。

「確かに、みんなに何も言わずに出ていったのは俺が悪かった　　すまん」

俺は手を合わせて謝った

「分かりました。ただし、夏にはこっちに帰って来てくださいね」

「おう、約束するよ」

「じゃあ　コレ　しますか」

シノは小指を立ててそう言った

「お前、昔からそれよくしてたよな。」

「約束事をする時はこういうのが大事なんですよ」「そうだな」

俺は自分の小指をシノの小指に絡ませた。

そして肘をテーブルに置き体勢を整え、

「じゃ、やりますか

小指相撲

」「はい」

「レディー、ゴー!」

「こういう時つて指切りげんまんじゃないの!」

もう一人の少女、アリスのツツコミを他所に二人は激しい闘いを繰り広げたのだつた。

「ふー。中々いい勝負だったぞ、シノ」

「イズミくんも腕をあげましたね」

俺とシノは互いを讃えあつた。久しぶりに小指相撲したな。

「てかアリス、久しぶりだな。いつこつちに来たんだ?」

「今年の春だよ。ホームステイ以来だね」

「アリスは私に会うために日本に来たんですよー。」

「アリスのシノ好きと身長の高さは相変わらずだなあ。」

「し、身長は関係ないでしょ！」

とまあ俺はシノとアリスと他愛のない話をして盛り上がった。

久しぶりに二人と会えて嬉しかったし、楽しかった

しかし、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。気がつけばもう夕方だった
「シノ、そろそろ帰ろうか。」「そうですね」

「二人とも気をつけて帰れよー」

「はい、約束 忘れないでくださいね」「ああ」

俺はシノとアリスを見送った。

そして、ラビットハウスに戻ろうとしたその時

「あ、イズミ〜ン！」

声とともにこつちへ向かってくるココア達の姿が見えた。

「ただいまー♪」です」

三人は元気にそう言った。

少し文句も言いたいところだが、最初に俺の口から出たのはこの言葉だった。

「お帰り、みんな。」

第十話 みんなでお泊まりですか？

「今日は雨でお客さんあんまり来ないねー。」

とココアが呟いた。窓の外では雨が絶え間なく降っている。早く止まねーかな

「二人ともこんな天気なのに遊びに来てくれてありがとうね」

ココアはそう続けて言った。今日は千夜とシヤロがラビットハウスに来ていたのだ。

「いいのよ、ちょうどバイトの予定が空白になっただけだし」

「そういえばシヤロバイトしてたんだよな。」

「ええ、イズミはこの前来てなかったわね」

「留守番してたから行けなかったんだ・・・」「・・・ドンマイね」

(まあ久しぶりにアイツらに会えたしいつか)

俺はそう割り切って仕事を再開した。

「シヤロ、コーヒー苦手なのに大丈夫か？」

リゼは心配そうにシヤロの前にカップを合わせて差し出す

「少しなら平気です。」(リゼ先輩の淹れてくれたコーヒーなもの)

本当かな、といった目で俺はコーヒーを飲んでいるシャロを見ていた

(何か嫌な予感がする…)

〜三分後〜

「みんなー！今日は私と遊んでくれてありがとうー！」

案の定である。こういう時の予感によく当たるんだよな ほんと

「時間が空いたらいつでももきてねー」

「いいの！いく行くー！」

「チノちゃんふわふわー！」 「あうう、シャロさん…」

シャロはコーヒーで酔ってハイテンションになった。どんな感じか例えるならリゼの「ココアが二人」がしっくりくるだろう。ラビットハウスが一段と賑やかになった。

「い、イズミ〜」

と、ここでシャロが俺に狙いを定めてきたのが分かった。俺はとつきに身構えるが、そんなものは通用しなかった。思いつきり正面から抱きつかれる

「ちよ、ちよつとシャロ！どうしたの?!いきなり。」

「えへへー♪ イズミー、イズミー♪」

俺が声をかけてもシャロは取り合ってはくれず抱きついたまま離れない

そして、俺はあることに気づく

目の前に綺麗な金髪があることに。

(こんな近くに金髪が！　もしかして、ここは楽園なんじゃ・・・)

ってダメだダメだ、この状況はいいとは言えない。

誘惑に負けそうになったが、俺はなんとかシャロから離れることに成功した。あのま

んまじや俺の理性が保たなかったな　　危ねえ危ねえ

「雨激しくなってきたねー。」

「風も強そうです。」

外を見ると雨はさつきよりも酷く降っていた

「千夜達は帰りどうする？」

「そうねえ」

俺の問いに千夜はシャロを見ながら考え込む。そのシャロはというと、熟睡中である。

「迎えを呼ぶから家まで送ってやるよ」

「いえっ私が連れて帰るわ！」

リゼの提案を遮るように千夜はそう言った。なんでやる　送ってって貰えばいいの

に

「じゃ、じゃあまたね。」

「おう・・・じゃあな。」

シヤロをおぶって今にも倒れそうになりながら千夜は出ていった。
どう考えても無事に帰れるわけではない。

「ココア、ちょっと様子を見に行こう。」「うん」

「おい千夜ー、大丈夫か」

俺が様子を見に行つたところで 時すでに遅し だった。

「千夜ちゃああああああん!!」

千夜は店の前で倒れていた。

第十一話 続 みんなでお泊まりですか？

「あれ、なんで私びしょ濡れ……」

「ん、起きたかシャロ」

倒れていた千夜とシャロを俺とリゼで助けた後、二人は目を覚ました

シャロに至ってはコーヒー酔いも無くなっていた

「千夜も無理すんなよ」「ごめんなさい」

「えっと、今日は泊まってってください。風邪をひいてしまうので二人は先にお風呂どうぞ」

「じゃあお言葉に甘えちゃうわね」

そう言つて千夜とシャロは風呂に入っていた

「リゼ、お前も泊まってくか？」

「え、良いのか？」「別にいいですよ」

チノちゃんがそう答える。リゼは若干顔を赤くして戸惑っているようだった
「もしかしてリゼちゃんお泊まり緊張してる？」

見かねたココアがそう尋ねた。

「いや、ワイルドなキャンプしか経験した事無いから、こういうの初めてで……」
リゼの返しは意外なものだった。いやなんだよワイルドって、ココアも「ワイルド？」ってキョトンとしてるし

とりあえず、俺達四人はチノちゃんの部屋にいる。部屋にはボトルシップやらなんやら置いてあって、いかにもチノって感じだった。

と、俺は唐突にある事を思い出す。

「あ、そうだ。ごめんみんな 俺一回自分の部屋行ってくる」

みんなに一声かけた後、俺は自室に入りある物を取り出す。

「あつたあつた。じゃあみんなのトコ戻るか」

そして、俺がチノちゃんの部屋に再び入ると

「い、イズミ！　ち、違う！　これはじゃんけんで負けて……」

なぜかチノちゃんの制服を着たりゼがいた。どうやって着たんだよ

「ところでイズミン何取ってきたの？」

「ああ、これこれ。ジャーン！」

そうやって俺が取り出したのは

「ジグソーパズル（ですか）？」 「三人は口を揃えて言う」

「そう、8000ピースの」「8000ピース!？」 その内二人はもう一度声をあげた

やり始めてから15分、一向に進んだ気がしない。ピースの数が多すぎたのかパズルが難しいのか。風呂から上がって来た千夜とシャロも加わり、千夜は笑みを浮かべながら、シャロは半ば呆れつつ手伝ってくれた。

「ダメだ全然終わらないぞこれ・・・」

「一回崩してしまっっちゃえば？」

だが、そんなシャロの提案を俺は遮る

「俺にはそんな勿体無いことできねえ。それに・・・」「それに？」

「あの熱中してるリゼを止められるか？」

俺はリゼに視線を向けそう言う。リゼは楽しそうな顔で夢中でパズルをしていた。シャロもそれを見て「確かに・・・」と同調する。

「じゃあ私達お風呂入ってくるね〜」「おう」

ココアとチノちゃんが一旦抜けたがそれでも俺達はパズルを続ける。1ピースもハマらずに千夜が落ち込んでたり、かと思えばリゼとシャロが譲り合っているとピツタリとはめてたり。

その後、リゼ↓俺の順で風呂に入るために途中席を外したが他のみんなは黙々とパズルをしていた。

そして、

「ふーさっぱりしたー。」

さつとシャワーで済ませた俺はチノちゃんの部屋の扉を開ける。

「あ、イズミン。パズル完成したよ〜」

床の方を見るとあの8000ピースもあつたパズルが見事に出来ていた。六匹のうさぎが描かれたパズルだ。

ありがとう、とみんなに礼を言おうとしたが、全員疲れきっていて今にも寝そうだった。正直俺も眠い

「それじゃ、みんなおやすみー」そう言って自分の部屋に戻り寝ようとしたその時、

ガシツ

「イズミく、どこ行くの〜？」半目で眠たそうなシャロが俺の腕を掴んでいた

「いや、自分の部屋に戻って寝よう〜」ガシツ「イズミくん一緒に寝ようよー」

掴まれたもう片方の腕を見るとこちらにはココアが。こいつら寝ほけてる！

(いやいやいやいや、女の子の中に男一人は色々まずいって!!)

そう思った俺は必死に抵抗し、自室に戻ろうとする。が、悲しきかな俺は非力なため二人がかりで腕を囚われてはなす術がない。

結局、寝ぼけてたココアとシャロが俺の両隣りにぴっとりくつついて寝ていたので、今日ぐつつすり寝たかった俺はドキドキして全然眠れなかった。

はあ、どうしよう

明日は朝一で出発なのに

番外編 一 今日はシャロの誕生日ですか？

7月15日、朝

「シャロちゃん、お誕生日おめでとー」

「どうしたの、いきなり」

今日はシャロの誕生日。千夜は朝からそれを伝えたくてシャロの家まで（甘兎庵の隣だが）来たのだ。しかし、その返事は素っ気ないもので千夜はぷくつと頬を膨らます。

「冷たいわね、今日はシャロちゃんの誕生日なのよ？」

「それはそうだけど・・・」

「まあいいわ。それより今日は何する？」

千夜は笑顔に戻るとシャロにそう言った

「何って、勉強？」

「シャロちゃんは本当に真面目ね。」「うるさいわね」

二人はその後も少し話をしてしたが、ふいにシャロが時計の方を見ると彼女は驚くように目を見開いた。

「もうこんな時間！早くしないと遅刻しちゃうー！」

「遅刻って、今日は学校ないわよ。」

彼女らにとつて今日は休日である

「今日は朝からバイトが入ってるのよ」

が、シャロはゆつくりと休んではいられないようだ

「じゃあ千夜、行つてきまーす!」

「あ、ちよつと待つて!」

千夜の言葉が聞こえなかったのかシャロは全速力で駆けていった。口調から察するにかなり焦っていたようだ

「はあ、シャロちゃん・・・」

千夜は溜め息まじりにそう言いながらシャロの後ろ姿を見送った。

「おーす、千夜ー遊びに来たぞ。」

「あら、イズミくん。午前中からどうしたの」

甘兎庵を開店してから間もないのに早速イズミがやって来た

「今日はラビットハウスの仕事無いし、暇だから」

「ふふっ、いいわ。座って」

千夜に言われて、イズミは席に座る。

「今日は何にする？」

「じゃあこの黒曜を抱く桜花で」「分かったわ」

.....

「ふー美味しかった。ありがとう千夜」

「そう、よかったわ　　・・・」

千夜は何か浮かかない顔をしていた。気になったイズミが彼女に尋ねる

「千夜、どうしたんだ？」

「ん　なにが？」

「なにが？　　じゃねえよ。さつきから暗いぞ　　どうしたんだ」

「イズミくん、実は――」

千夜は今朝の事をイズミに話した

「今日はシャロの誕生日だったんだな。」「そうなのよ」

「でね、イズミくん やっぱり私シャロちゃんをお祝いしたいの。ささやかでもいいから」

それを聞いたイズミは少し考え込み、こう言った

「俺も同じ意見だ。シャロの誕生日祝ってやりたい」

「ありがとう、イズミくん」

千夜は嬉しそうにイズミに感謝の言葉を述べる

でも、まだイズミの話は終わってない

「ただし、やるからにはささやかではダメだ。一年に一回の誕生日なんだ 盛大にやらないとな」

イズミはそう言いながらケータイを取り出す。電話をかける先はもちろん

ココア達、ラビットハウスの方だ

「はー、疲れるー。」

シャロは休憩をとっていた。無理もない 朝から一度も休みをとらずに働いていた

からだ。今日はいつものバイト先ではなく、クレープの屋台のバイトだ

「後少しでバイトも終わりね、よーし！」

シャロが気合を入れて仕事を再開しようとしたその時

「あれ、シャロじゃーん。偶然だね」

イズミが颯爽とシャロの前に現れた。

「といつても偶然ではない。今日の主役であるシャロをさつきから探していたところだ」

「あ、イズミ」「よつす、クレープ一つくださいな」

イズミがそういうとすぐにクレープが彼の元へ渡った。シャロのクレープ作りは速く、上手いで有名だそうだと、まあそれは置いて本題に戻ろう

「そうそうシャロ、バイト終わったあと時間ある？」

「え、そりゃああるけど・・・」

「じゃあさ、ラビットハウス寄っていかない？」

「うーん、どうしようかな」

シャロはどこか迷っている様子だ、仕方ない奥の手を使うか

「えーと、確か今日はリゼがシフトに「いきます」

即答だった リゼパワーースゲーな

「シャロ、バイトお疲れさん」「お疲れー」

シャロのバイトが終わって今イズミ達はラビットハウスへ向かっているところだ

「あれがみんなが見に行ったバイト先か？」

「ううん。いつもは喫茶店でバイトしてるの」

「て事はバイトを掛け持ちしてるのか。大変だな」

「それでも無いわよ。」

「ってギャー！」

急にシャロが叫びだした。イズミはどうしたんだと思ったが足下を見ればその理由が分かった

「あ、シャロうさぎ苦手だったもんな」

気がつけば辺りはうさぎだらけだった。イズミはその中の一匹を抱え上げそう言う

「あなた良くそんなもの持てるわね」シャロが若干引いた目でイズミを見ていた
「慣れればかわいいもんだぞ、ほら」

イズミは抱いていたからうさぎをシャロの前にさしだす

「い、い、イヤー！」バシーン 「グヘッ」

「・・・ごめん、イズミ」 「大丈夫だ。慣れてるからヘーキ」

うさぎ地帯を抜けラビットハウスも見えてきた。

「よしついた、シャロ先入れよ」「ありがとう」

そして、シャロが中に入ると

「シャロちゃん」

「「お誕生日おめでとー！」「」 パーン

クラッカーが鳴ると同時に四人の声が響いた

当の本人のシャロは状況が全く分からずポカン としている

「シャロ、お誕生日おめでとう。」

「え、うそ。みんな！これって・・・！」

「俺と千夜で考えてその後みんなに伝えて準備してたんだ」

「シャロちゃんの誕生日まだ教えてもらってなかったけど間に合ってたよ」

「言ってくださればプレゼント用意出来たのですが、すみません。」

「いきなりだったし、仕方ないだろ。シャロ、お誕生日おめでとう。」

ココア、チノ、リゼの順でみんなはそう言った

「先輩、みんな、ありがとう」

シャロはみんなにお礼を言う。その目には少し涙があった

「やっぱこれくらい盛大にやらないとな、千夜」「そうね」

「よっしゃ、みんな。今日は楽しもうー！」

「「「おー!!」」」」

シャロの誕生日パーティーは夜まで続いた。

第二章 イズミン、帰省します

第十二話 ただいまの前の

「おはよーチノちゃん」

「おはようございます、ココアさん」

お泊まり会翌日の朝、いつも通り二人は朝の挨拶を交わす。

「いつもは寝坊ばかりなのに今日は早いですね」

「えへへー あれ、イズミンは？」

昨夜横で寝たイズミンがいない事に気付きココアは疑問を抱く

「ああ イズミンさんなら実家に帰りましたよ」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・ええーーーーー！！」

「ふー、やっと着いたぜ」

電車に揺られて数十分、俺は去年まで住んでいた街に戻って来た。

「約束果たしにきたぞ、シノ」

俺はそう独りごちて歩き出す。みんな元気にしてるかなー

.....

「懐かしいなー、この街の景色も」

とりあえず俺は駅から出てシノの家を目指しているところだ。にしても、本当に懐かしい。数ヶ月しかこの街を離れてないのに

(まあ、それだけ木組みの街の生活が楽しかったんだろうな)

そんなことを俺は思いふけていた。

そのせいで気づかなかった

曲がり角から女の子が走って来てたことに

ドンツツ!

案の定俺ともう一人はぶつかりそれぞれ小さく呻き声を上げる

「ううー……イテテ、大丈夫か?」

先に体制を立て直した俺はぶつかった彼女に声をかける

が、彼女の姿を見るなり俺は驚いてしまった

ストリートにたなびく金髪、なぜか少し汚れているユニオンジャックのパーカー、
間
違くない

(外人!!!!金髪美少女!!ついに俺の元に!!!!)

とも思ったが一旦我にかえる。まずは目の前の彼女を助けるのが先だ

「えーと、Are you OK? (大丈夫ですか?)」

相手は外国人なので英語で質問する。何を隠そう、俺は英語だけは得意なんだよ!

そんな底辺レベルの英語を心の中で自画自賛している俺をよそに、彼女は少しキョトンとした後こう言った

「私、日本語喋れマスよー」「え、」

なんだこの敗北感。さっきまでの自分が恥ずかしくなってきたぞ……

「へー、カレンっていうのか」「そうデース!」

とりあえずさっきの金髪少女 カレン を助けた後、俺は二人で街を歩いていた。

「さっきは急にぶつかってゴメンナサイデース」

「いいよいいよ、俺も不注意だったし」

カレンとはすぐに打ち解けて話も弾んだ。

「ところでカレンはどこか行く予定なかったの？」

「あ、そうだったデス。友達と商店街で待ち合わせしてました。でも場所がよく分からなくって困ってたデス」

「それでさつきは急いでて走ってたんだ」

「いや、あれは猫を追いかけてただけデス」「あ、そうなの!？」

俺の推測はあつさり和外れた。ちよつとシヨック

「てか、道分からぬのか?なら案内するぜ」

「いいんデスカ!」

俺の提案にカレンは目を輝かせる。その笑顔がとても可愛くて俺は少し見惚れた。

「ああ、ついて来てくれ」 「了解デス!」

そういうとカレンは俺の手を握ってきた。突然の事に俺は驚いたが、カレンが「はぐれないよう手は繋いでおくデス」と言ってきたので従うしかない

(カレンの手、柔らかくてあつたかい・・・)

そんな事を思いながら俺とカレンは商店街を目指した

第十三話 続 ただいまの前の

「カレン、もうそろそろ着くぞ」「はいデス！」

俺は今カレンと一緒に商店街へ向かっているところだ。といつても自分の言葉通りもうすぐ到着なのだが

(カレンの友達ってどんな人だろー もしかして、カレンは綺麗な金髪だからお友達も綺麗な金髪なのでは!?!これは商店街が金髪の楽園になる可能性が・・・!)

俺はそう思い期待の目でカレンを見る。それに気づいたカレンが「どうしたんデスカ？」と首を傾げたので俺は なんでもないと返し目を逸らす

と、商店街に着いた。俺は辺りを見回す。だが、それらしき人物は見当たらない。

「なあカレン、お前の友達どこに居るか分かるか？」

「おかしいデスねー 集合時間はとつくに過ぎてるんデスが」

「えっ じゃあ俺ら間に合ってないじゃん」

「大丈夫デス。こんなのいつもの事デス！」

「毎回遅刻じゃだめだろ!!!」

グーサインでそう言うカレンに俺はツツコミを入れる。すると、さつきまで俺を見ていたカレンの視線がそれた。どうやら俺の後ろの方を見ているらしい

「あ、みんないまシター！」

おい、と元気に手を振るカレン。俺は察する。背後に居るのはカレンの友達、金髪美少女であろうお方に違いないと。

期待に胸を膨らませゆつくりと振り返ると、そこには――

中学時代を共にした二人の少女の姿があった。

あれ、金髪少女は？

「アヤヤ、ヨーコ、お待たせデス」

「もう遅いわよカレン・・・ってイズミ!?」

「おお、イズミじゃん！久しぶり〜」

「よつす二人共、偶然だな」

二人の少女――綾と陽子に俺は軽めに挨拶を返す

「ていうか二人はなんでカレンと一緒に…」

俺はそう言いかけて止めた。綾が陽子とカレンを集め俺に背を向けてなにやら話をしているのが見えたからだ。何か少し焦っているようにも見える。

その後、彼女は携帯を取り出し誰かと連絡をとっていた。そしてその誰かとの通話を終えるなり綾は何か考えている様子を見せた。どうしたんだ？さつき三人だけで話し合ってたのも気になる。俺に隠し事でもしてるのだろうか――

「もう遅いわよカレン・・・ってイズミ!？」

「よつす二人共、偶然だな」

カレンの遅刻っぷりに呆れたのもつかの間、綾は突如遭遇した以外の人物に驚く。そして、すぐさま陽子とカレンを集める。何かイズミが喋っていたようだが気にしないでおくことにした。

「ちよつと待つて！イズミがこつちに戻ってくるのは明日じゃないの?！」

「おう、明日だつてシノから聞いてるんだけど」

「え、あの人がイズミなんデスカ!？」

とりあえず彼に聞こえないよう小声で話す。しかし、話の様子を見る限り三人共混乱しているようだ。

「そ、そうだわ！シノに連絡しましょう」

綾はそう言つて携帯を取り出し忍に電話をかける

プルルルル

ガチャ

『ハイ、大宮です』

「シノ、今なにしてるの？」

『ああ、綾ちゃん。私は今アリスと一緒に明日のイズミくんのサプライズパーティーに向けて準備をしているところですよ。どうかされましたか？』

「実はそのイズミが目の前にいるのよ。シノ、もしかして日付間違えてない？」

「.....」

数十秒程の沈黙の後、携帯からは慌てた声が出てきた。

『本当です！日付によると明日じゃなくて今日でした！』

やっぱりか、と綾は心の中で思う

『とりあえずコツチも大急ぎで準備します。綾ちゃん達もイズミ君に悟られないように準備をお願いします。』

「ええ、ちよつと待つて」

ツー ツーと電話はそこで切れた。どうしようかと綾は少しばかり悩む。

(まずいわね。一体これからどうしたら

第十四話 ただいま

忍 side

「はあくいよいよ明日ですねーアリス」

「そうだね、シノ。」

アリスとシノのはそう言って折り紙で輪っかを作りそれを繋げていた。二人はイズミのサプライズパーティーのための飾りを作っているのである。

（でも、イズミが帰って来るのは今日じゃなかったかな。ちよつとシノに・・・いやいやシノはこんな初歩的なミスはしないよね。だいじょうぶ大丈夫！）

アリスの中では若干の戸惑いがあったようだがそれは忍への熱い信頼の力でかき消された。

「よし、輪っか飾りはこれくらいで十分ですね。次は花を作っていきましょう。」

「うん。何個ぐらい作ればいいの?」

「そうですねー、えーと…」

すると、プルルルル　と電話の音が鳴った。

「シノ、電話だよ。」

「そうですねアリス。ちょっと行ってきます」

そう言ってシノは電話の方へ行き受話器をとる

「ハイ、大宮です」

『シノ、今何してるの?』

受話器からは忍の友達、綾の声が聞こえてきた。しかし、綾は焦っているのか少し早口になっているのがシノには分かった。

「ああ、綾ちゃん。私は今アリスと一緒に明日のイズミくんのサプライズパーティーに向けて準備をしているところですよ。どうかさされましたか?」

しかし、シノは気にせず今の状況を綾に話す。

『実はそのイズミが目の前にいるのよ。シノ、もしかして日付間違えてない?』

え、、とこれにはシノも驚いた。すぐ横にあったカレンダーを見ると今日の日付にグルグルと赤丸がつけられていた。すぐ下には「イズミくんが帰って来る日」と書かれている。

「本当です!日付によると明日じゃなくて今日でした! とりあえずコッチも大急ぎで準備します。綾ちゃん達もイズミくんに悟られないように準備をお願いします。」

シノはそう言つて電話を切った。そして、

「アリス、大変です!急いで花飾りを作ってくださいーい!」

・・・で、マジでどうしたんだ？

目の前で一人考え込む綾を見て俺はどうしたらいいか分からないでいた。すると、

「あ、そうそう。イズミ、私達今から買い物するんだけどよかつたら一緒に来ない？」

俺が放つたらかしにされているのを察したのか陽子が話しかけてきた。

「おう、いいぞ。何買うんだ？」

「それは・・・まあ後で。綾、カレン、二人はこつちを頼む」

そう言つて陽子は二人を呼んで何か話をした後、メモを渡し別れた。どうやら俺と陽子、綾とカレンの二手に分かれて買い物をするようだ。

なぜ二つに分かれるのか俺は陽子に聞いてみたがはぐらかされてしまった。ふーむ、怪しいな。買うものを言わなかったのはなんでだろうか。まあ良いや、ついていけば分かるだろ

・・・

その後、100均やスーパーなど俺たちは色々回って買い物をしていた。一段落ついたところで俺はとりあえず陽子が買ったものを見てみた。

クラッカー三本入りを何セットか、パーティー用の帽子、2リットルのジュース、
t c : : e

「なあ陽子」「ん、なに？」

「ざっきからなんでパーティーグッズばっかなんだ？」

「えーと、それはその・・・」

またしても陽子は言葉を濁す。目を泳がせて俺と顔を合わせようとしな

い。ここで俺は一つの考えが頭に浮かんだ。

「陽子、もしかして・・・」

もうすぐあ空太君と美月ちゃんの双子ちゃん達の誕生日だろ！」

「いや、違うぞ」

今度ははぐらかされずに即答で返された。こんだけハッキリ言われると間違えた自分が恥ずかしくなってきた。しかも自信満々で言ったから余計に恥ずかしい

「よし。イズミ、全部買い終わったからもういいぞー」

「ん、これで全部か。」

「付き合ってくれてありがとな」「おう」

そう言つて俺は近くにあつた時計を見る。時刻は12時すぎ、丁度いい時間だ。

「よし、もうそろそろシノの所行くとするかな。それじゃーな、陽子」

俺はシノの家を目指して歩き出した。そして、その少し後

「もしもし、忍。準備は出来た？綾達は？」

・・・よし、私もそつちへ向かう。す

ぐ行くからー！」

「ふう、やっと着いた。」

商店街からシノの家までそう遠くはないのだがさつきまで動き回っていたからか俺は少し疲れた。

「さつきと中に入ってゆっくりしよう」

そうして、ドアを開けると

「「「イズミ（くん） おかえりーーー!!!」」」

突然のクラッカーの音と共に、帰って来た俺を祝福する五人の声が出迎えてくれた。

・・・ああ、そっか

「さつきのパーティーグッズはこれのためだったか」

「ええ、まあね」

俺が今やっと気づいたのを見てか綾は少し自慢そうに言った。確かに俺に勘付かれないように上手く立ち回るのは難しいからn…え？余裕だつて？またまたく

「ほら、イズミ。用意は出来てるんだから。早く早く！」

アリスに手を取られリビングに入ると綺麗に飾り付けがしてあり、テーブルの上にはケーキがあった。後から聞いた話だがあのケーキは二手に分かれた時に綾とカレンが取りに行っていたらしい。

ま、とりあえず

「ありがとう、みんな。よーし 思いつきり楽しむぞー！！！！」

「！！！！おー！！！！」

「ふー、食った食った。」

「ケーキ、美味しかったデス。」

「カレンと陽子で半分近く食ってたもんなー」

みんなと沢山話をしてケーキを食べていると、ケーキはあつという間に無くなつてしまった。それでもまだまだ話は尽きない。あと、お菓子やジュースもまだ尽きない。

「私、こんなに食べて・・・太らないかしら」

「綾ちゃん　　こういう時は気にしないで食べた方がおいしいですよ」

「そうそう。ってアリス、その和菓子は？」

「栗羊羹だよ。最近美味しい店を見つけてね」

へー、と思いながら俺はその栗羊羹を一口食べた。

あれ、この味どっかで食べた事あるような

第十五話 ただいまの後の

あれから三日がたった。

——早朝

「ふわく、やっぱり朝は眠いなあ」

目を擦りながら俺はリビングへ向かった。

「おはよう、イズミ」

そう声をかけたのは大宮 勇、忍の姉でファッションモデルだ。

「おはようつす勇姉。相変わらずお美しいっすね」

「まったたく、あなたも相変わらず調子いいんだから」

食べる？　と言われ黒い目玉焼きを差し出された。俺はやんわりと断る

「また勝手に作ったんすか。料理あんま得意じゃないんでしよう」

「イズミに任せる訳にもいかないじゃない。あんたの味覚、どうかしてるわよ」

そう言われ、俺は言葉に詰まった。確かに俺は焼き魚にピーナッツバターを付けて食べてたし、実はパン作りの時もあの後リゼに指摘された。とにかく俺の味覚は狂った……少し変わってるのである。

しかし、焦げてるものまでは好んで食べない

「せめて焦げてないヤツをくれませんかね」

「お母さんは朝からいないし、忍達はまだ起きてないからこれしかないわ」

「なん…ですと…」

朝から空腹で辛かった俺にこの一言はかなり効いた。

それに呼応するように腹の虫が鳴る

仕方ない、俺に作れるものは・・・

・・・

「で、イズミくん。それは何ですか？」

「ピザトーストだよ。よく見てよ」

そう言つて起きてきた二人に見せた俺特製ピザトースト。
それは彼女達曰く本来の物とはかけ離れていたそうなの

(一体何を入れたらあんなのができるんだろう…)

(そしてそれを一切躊躇わずに……どうして……)

そんな事を考えてる二人を尻目に俺はピザトーストを食べ進めてった
味い。

うむ、美

—— 昼

「はー、暇だー」

そう言いながら久しぶりに戻ってきた俺の部屋でゴロゴロする。

去年から空けていた俺の部屋は思いの外綺麗で家具の配置も変わってない

「何かいい事起きないかなー」

ちなみに忍とアリスは朝から出かけている。

どうやらまたあの五人でどっかへ遊びに行ったらしい
昼には帰って来ると言っていたが：

「遅いな」

家は今俺一人だけだ。

テレビは見飽きたし、持っている漫画は全て読破した。

暇つぶしに使ってたパソコンはラビットハウスに置いてきちやったし

・・・なんて間の悪い

「空から金髪少女降ってこないかな」

そんな意味不明のつぶやきをしてゴロゴロしていると

ピンポーン

不意にチャイムがなった

「はいはい！今行きますよーっと」

暇を持って余してた俺は即座に反応し、玄関へ向かう

「どちら様ですか」

そう言つて扉を開けると

「甘兎庵です。お届けに参りましたー♪ あら？」

聞き覚えのある声と共に和服姿の少女が一人

——千夜だった

「千夜！どうしてここが…まさか、俺を追つて」

「違うわよ」

笑顔で即否定された。

いや違うのはわかっているけどさ…

「ならどして？」「それはね——」

その時、

「あ、千夜さん。お届けに来てたんですね」

忍達が帰つて来た。

第十六話 続 ただいまの後の

忍の家、リビングにて――

「にしても意外な組み合わせですなー」

俺はそう言つて千夜の持つてきた羊羹、千夜月を頬張る。

目の前には仲良く女子トークを繰り広げる六人の姿があつた

(みんな楽しそうに話してらっしやるなあ) モグモグ

(何を話してるんでしようかねー) モグモグ

(俺も混ざりたいけど、やっぱり女の子の会話には着いていけないしな) モグモグ

「・・・いつまで食べてるの、イズミ」「えっ別にいいじゃん」

モグモグ食つてるのが気に入らなかつたのか綾にジト目で見られた。

美味しいんだから良いではないか

うーむ、このまま待つても女子トークが終わりそうにないので本題に入ろうか

(ちなみに食べるのはやめない。コレうまいし)

「おーい、盛り上がつてるとこ悪いけどもうそろそろ本題に入らせてねー」モグモグ
「はい、なんでしようか？」

「忍と千夜が出会ったきっかけて・・・ウツ」

言いかけた途中で俺は腹痛に襲われた

忍達も心配した様子でこちらに駆け寄る

「だ、大丈夫ですか!？」

「よ・・・い・・・た」

「え、どうしたの？」

「よう・・・くい・・・た」

「なんて言ってるデス？」

「羊羹・・・食い過ぎた・・・」

「ただの自業自得じゃねえか」

うん、陽子正論です。でもまだ二本しか食べれないんだよ。ココアの栗羊羹三本の道は険しい…

「ごほん。では、腹の痛みも治まったので本題」「はい」

「忍達と千夜の出会いのきっかけは？」

「それは、アリスなんですよー」

忍はアリスの肩に手を置き自慢げに答えた

「ん、どういう事？」「それはね――

――

「ねえシノ、これ見てよ！」「どうしたんですか、アリス」

「和菓子だよ、すごく美味しそう」

「三色団子、白玉ぜんざい。甘味は甘兔へ　　ですか〜」

「ネットで注文もできるみたいだよ」

「では、早速やってみましょうか」「うん！」

———
「つて事なの」

「ネット配達はもうやめちゃったんだけど、ここは常連さんだからたまにね」
「いつの間にそんなハイテク化してたんだ甘兔庵」

さすが世界進出を狙ってるだけあるな…

「あ、そうそう。私も聞きたいことがあるんだけど」
「ん。どうしたんだ、千夜」

「誰がイズミくんの彼女さんかしら？」

「!!?」

千夜の唐突な質問。(しかも恋愛系の)

普通ならば全員が赤面して「ちちち違うよ!？」とかいう場面なんだろう

「彼女?」「イズミの?」「どゆこと?」「何の話デス?」

この反応には千夜も「あれ?」という顔をしていた
今まで友としていた時間が長いせいだろう。

そう、俺たちの間ではそういうのは全くなかったのである
・・・まあ、例外はあるが

「……………// // //」プシューーーー

「おーい、綾ー大丈夫かー」

この後、綾が素に戻るまでは少し時間がかかった。

第十七話 木組みの街からの来訪者 前日

「いけない、もうこんな時間だわ。帰らなきゃ」

話をし続けること小一時間、ふと時計を見た千夜がそう言う。

「えー、もっと喋ろうよー」

「そうデス！まだ話したい事いっぱいあります」

「ふふ、ありがとう。でもお仕事があるから・・・」

陽子とカレンは呼び止めようとするもそれは叶わない

まあ、人には事情つてもものもあるのだから仕方がないだろう

「でも、お話はイズミ君の方からたっぷり聞けばいいじゃない♪」

と、千夜が俺の肩にポンと手を置く。

「確かにそうデスネ、イズミ！今日は寝かさないデスよ！」

「洗いざらい吐いてもらうからな！」

「陽子、それじゃ尋問だわ！というか泊まるつもり!?」

綾の的確なツツコミが入る。

というか男一人女複数の寝泊まりってなんかデジャブな気がするんだが

「うーん、夜遅くまでか…」

「別に泊まってくれても構いませんけど・・イズミ君どうかしましたか?」

「いやー夜遅くまで起きてると肌荒れないか心配で」「女子か」

陽子、女の子なのに女子かってそれは無いんじゃない? あ、そうだ

「早く寝ないと背も伸びなくなっちゃうしなー心配だなー」

俺はそう言いつつアリスに目をやった。

まあアリスも身長を気にしているとはいえこれは露骨過ぎたか

「・・・そうだよ！みんなも早く寝た方がいいよ！」

いや、大丈夫だった。

あ、カレンがこっち見てる。アリスをからかっているのを察したか

「あはは、冗談だよアリス。一日夜更かしするぐらいどうって事ない」

「イズミはアリスをからかっただけデス」

「そうだったの!?!もう、ヒドイよイズミー」

と、アリスが俺の背中をポカポカ叩く。さながら小動物の反抗の様に

「ふふふ、微笑ましいわね。じゃあ私はこれで」

「あ、千夜。なら玄関まで見送るよ」

俺と千夜は玄関へ向かった

.....

「にしても偶然の出会いだったな」

「そうね。これが運命の再会、だったりして」

「まさかね。あ、そうそう来週にはラビットハウスに戻るわ」

「そう、分かったわ。.....その前にみんなを連れて来なきやね」

「うん？なんか言った？」「いいえ何でもないわよ」

最後の方が聞き取れなかったので俺は問い返したが千夜に上手い具合にはぐらかされてしまった。

その後、じゃあね、と手を振る千夜を見送った。

結局最後の部分の真相は分からずじまい。俺にはモヤモヤが残った

そのモヤモヤを取り除こうとして、何を言ったのか答えを出したくて

気づいてしまう、

「あいつら、まさか来るんじゃないだろうな.....」

「イズミ君、どうしたんです？」

「早く話を聞かせてほしいデス」

「私も聞きたいわ。イズミの住んでる所はどんなところなの？」

と、みんな待ちきれなさそうにしていた。

「ここ」まで聞かれてるんだ、とことん聞かせてやろう

「そうだなー、じゃまずは俺の今の勤め先のラビットハウスから

――

余談だが、最近の俺の予感はずと云っていいほどの中する

ピロリロリン

ラビットハウスに一通のメールが届いた。

第十八話 続 木組みの街からの来訪者 前日

むくり、と俺は布団から起き上がった

時刻は午前九時。普段なら学校には遅刻なので焦る時間だが今日は問題ない。夏休みだから

「んんん」と

ゆっくり伸びをする。

こうやってのんびりとしてられるのは夏休みの特権である

だから、いくら夜更かししても大丈夫だ

結局昨日は夜までたつぷりと話してしまった

ココア達五人の事、木組みの街の事、そこでの様々な出来事。

綾と陽子とカレンは途中で帰ったがその後もアリス、忍と話を続けた

(そういえば、三人が帰り際に準備があるのかなんとか・・・)

そんなことをふと思いついたが、気にしなかった

「お腹すいたな、飯だ飯だー」

ダイニングに行くと言姉がいた。

今日は朝早くの仕事はないのかな、と俺はのほほんとしながら思ったがそれとは裏腹に言姉は驚いたような表情を見せた

「え、イズミ？ あんた忍達と一緒にいったんじゃ・・・」

「おはよう言姉。どうしたの、俺の顔になんかついてる？」

「いや、そうじゃなくて・・・」

言姉は明らかに困惑しているようだった

ここまで困惑する言姉も珍しい

そういえば、さつきから忍とアリスの姿がない

昨日も遅かったからまだ寝てるのだろうか

「ところで、二人はまだ寝てるの？」

「あのねイズミ、忍達は

同時刻、ラビットハウスにて

「昨日千夜ちゃんからメールがきてたよ」

「どうしたんですか、いきなり」

朝食の席で急に何を言い出すのか、とチノは呆れたように言った

まあ、ココアのこう言った言動は今に始まった事ではないのでこのやり取りもラビットハウスでは日常的なものだ

「ねえ、今からイズミンのところに行ってみようよー」

ココアはメールの内容を簡単に話して笑顔でそう言った。
突然の提案にチノははあと息をつく

「ココアさん、そんなに急には無理ですよ。それに今日は仕事が・・・」
「いいじゃないか、行って来なさい」

チノの言葉を途中で遮り、タカヒロが二人に声を掛けた
その言葉に一人は驚き、一人は笑顔になる

「お父さん、でも今日は・・・」

「今日ぐらいチノもココア君と一緒に楽しんでおいで」

「ありがとうございます！よし、チノちゃん行くよ！」

朝食を食べ終え、ココアはチノの腕を掴んで引っ張る

チノもそれにつられて椅子から立ち上がり、ココアに連れられる
「こ、ココアさんどうする気ですか」

「まずは準備しなくちゃね。あとリゼちゃんも誘おう！それから・・・」

楽しげに話しながら二人は二階へ上がっていった

「はあ……」

深く、深く俺は溜め息をついた。

さっきまでの元気は何処へやら、といった感じだ

仕方ないじゃん。さっき勇姉にこう言われたんだもん

『忍達はね、今朝早くから五人でまた出かけたのよ』

一瞬、へ？つてぐらい耳を疑ったがどうやら事実である

今彼女達は自然に囲まれながらレジャーを楽しんでるのだろう
だから、要するに

「俺、置いてけぼりかよお・・・」

そういうことである

(まあ忍達が帰ってくるまでゆっくりしてるかな)

そう思っていた時

『ピンポーン』

玄関のチャイムがなった。こんな時に誰だろうか

「ハイハイ、今行きますよ」

すると、間髪いれずに

『ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン』

「いやうるせえよー」

怒涛のピンポンラッシュ

突然だったからすげーびっくりした

ホント誰だよ・・・

若干の不安を感じながら俺は玄関のドアを開けた

第十九話 木組みの街からの来訪者

ドアを開けると、目の前には三人の少女がいた

「一体誰だと思ったらやっぱりか。ココア」

「えへへ。ごめんごめん」

そう言つて特に悪びれる様子もなく笑顔を見せるココア
チノとりゼも後ろから顔をのぞかせていた

「だから言つたじゃないですか、イズミさん困つてますよ」

「まあ、ココアのこういうところはイズミも慣れてるだろ」

「だからつて良いとは言つてねえだよ・・・」

思わず訛つてしまった。これどこの方言なんだろう

つてそうじゃない

「いや待て、何でここが分かつたんだ？」

「それはこのメールだよ」

そう言つてココアは携帯を取り出し、画面を開く

誰からかつて？ 決まってるじゃないか

「やっぱり千夜じゃあねえかよお」

本日二回目のやっぱりである

こんだけ予想当たるんなら予言者にでもなつてやろうか

・・・今時予言者は流行らないか

俺が未来の選択肢を一つ断ち切っているとココアが不思議そうに俺の顔を覗く

「イズミン、どうしたの？」

「いやなんでもない。それで何の話だっけ」

「それでね、このメールを見て会いに来たんだよ」

「へー、わざわざ来たのか」

三人が来てくれたのは正直嬉しかった

忍達に置いてかれて、あの後勇姉も出かけちゃったしな

このままぼつちで家で過ごすなんて中学時代の俺の休日みたいだなハハハ笑えねえ

俺的には俺の中学時代よりもラビットハウスの方が心配だがとりあえず三人を招き入れた

「それで、何しに来たんだ。三人揃って」

「え？イズミンに会いに來ただけだけど」

「「えっ」」

まさかのノープラン

チノとリゼもこれには意外だったようで俺と同じように短く声をあげる

「ココア、何も考えてなかったのか・・・」

「ま、リゼもココアのこういうところは慣れてるだろう？」

「っ！ お前な〜」

リゼにさっき言われた事をそのまま返すと気恥ずかしかったのか照れ隠しか知らんが技をかけられた

「すみませんリゼさんギブです離してください」

「あ、すまない。少しやり過ぎた」

いや少してレベルじゃないくらい痛かったよ？

まあ、照れ隠しなら綾に「う、うるさいわねバカっ！」って言われ慣れてるから
・・・あれナチュラルにバカ呼ばわりされてるのに最近気づきました、はい

「ふむ、せっかく四人いるしラビットハウスごっこでもするか」

「何ですか？それ」

俺の言葉にチノは首を傾げる

「読んで字のごとくラビットハウスのごっこ遊びだな。しかし、遊びといえどこれは普段自分達が働いている職場への感謝の気持ちをお忘れないうちに行う、労働者にとつてはとも良いものなんだ」

「へー。．．．本当は？」

「雰囲気だけでもラビットハウスを感じたくて．．．」

リゼに強く問われ、俺は本音を漏らした

「実際あの街とラビットハウスは俺の第二の故郷みたいなもんだしいいじゃない

「いいね！みんなやってみようよー！」

「ココアは乗り気なようだ。ならば早速始めるか」

「もうすぐ俺の従妹が帰ってくるはず。準備を始めよう」

第二十話 友達の友達は友達になる

「さ、準備を始めるぞー」

「「おー！」」

ま、そんなわけでラビットハウス組の俺たちは準備に取り掛かることにした
と言つても設備があるわけじゃないからコーヒーと軽食ぐらいしか作れん
コーヒーはココア曰く「安心する味！」のインスタントだ

「コーヒーは戸棚の左にあつたよな・・・」

「私達は何をすればいい？」

「リゼはココアと一緒に軽食作り、チノちゃんはコーヒー淹れるの手伝ってね」
「分かりました」

リゼとチノちゃんに指示を出し、俺もさっさとお湯を沸かす
まだ時間的に猶予はある。あいつらが帰ってくる前には・・・

『ガチャ』

ん？

「何か扉が開く音がしましたね」

「もしかして帰って来たんじゃない？」

「ありえなくはないけど・・・ちよつと見てくる」

ココアの問いに曖昧な返事を返しつつ俺は玄関へ向かった

「なんだ勇姉だったのかよ」

「何よそれ。別に帰って来ただけじゃない」

「あ、そうそう。俺の友達が来てるからね」

「友達？ あんたにそんな子いたの？」

「・・・なんで俺がぼっちみたいない草なんだよ」

そんな会話をしながら勇姉を連れて俺は戻ってきた
初めましてな三人は予想通りきよとんとしている

「イズミン、どちら様？」

「俺の姉にあたる勇姉さんだよ」

「初めまして、大宮 勇です」

「こっこちらこそ！私保登 心愛っていいいます」

「敬語じゃなくていいわよ。よろしくココアちゃん」

「うん、よろしくね勇ちゃん！」

「なんの躊躇いもないなんて逆にすごいわね」

勇姉は若干視線を俺に送りつつ楽しそうにココアと話している
ココアのこういう時の適応力は高いからね

俺も最初はそのフレンドリーさにびっくりしたな・・・

そんなことをしみじみ思っている間に勇姉はすでに話を進めていた

「水色の髪の子がチノちゃんで」

「香風 智乃です。中学二年生です」

「紫髪の子がリゼちゃんね」

「はい、どうも」

「ん~~~~~」

リゼが紹介を終えると勇姉はまじまじとリゼの体全体を見ていた

なんかおっさんが向ける視線と同じような目してたけどどうでもいいか

「リゼちゃんスタイルいいし、モデルなってみたら？」

「えっ!? モデル、ですか!？」

「うん、良かったら私紹介しちゃうよ」

「勇姉こう見えてモデルやつてるから」

「こう見えては余計よイズミ」

横から肘で腹を突っつかれた

まあ他の人から見れば勇姉だって綺麗だからモデルしててもおかしくないと思うだろうが俺は別段そうは思わない

やっぱ長い間いたから姉弟補正でもかかっているんだらうか
まあ最初から一緒だったわけではないけど

「い、いや私はその・・・」

見ると、リゼはしどろもどろになりながら顔を赤くしている

中身は乙女だからな、恥ずかしいんだらう

「勇姉、リゼはそういうの得意じゃないから。だろ？」

「イズミ・・・」

「それにリゼの本性的に他のモデルさんが危機にさらされ・・・」

「・・・イズミ、どういうことだ」

おかしいな、二言目はぶいによぶいによ言っただが聞こえてたらしくまたリゼにクラッ

チをかけられる

痛い痛い！そういうところあるからおすすめしなかったんですよお！

「ふふ、仲が良いわね」

勇姉はいつの間にかチノちゃんに淹れてもらったコーヒーをすすっていた

第二十一話 続 友達の友達は友達になる

「こちら、出張ラビットハウス忍家。今日も三姉妹十一人で頑張ってます！」

「誰に向かって話してるんですか。あと、三姉妹じゃないです」

「おっと、いつの間にか声が出てしまっていた」

「気をとり直して俺はテーブルを拭く」

いつの間にかコーヒーの香りが部屋全体に広がっていて空気はさながらラビットハウスのようになっていった

「はあく、やつぱこの香りが落ち着くんだよなあ」

「イズミンすつかりカフェイン中毒だね。私と同じ！」

「えっ俺もうその部類なの・・・？」

「味の違いが分からないココアさんよりマシです」

「酷いよチノちゃん！」

意外と辛辣だなあチノちゃん

まあまあと二人を宥めていると、また玄関の方から音がした

「おや、ついに帰ってきたかな？」

「私出迎えてくる！」

.....

「千夜ちゃんとシャロちゃんも来たよ〜」

「おお、揃ったな」

ココアに連れられて千夜、シャロが入ってきた

同時に俺は千夜にジトローつと視線を送る

「.....」ジトロー

「.....！」グツ

千夜は親指を立てウインクを返してきた

いや別に千夜いい働きしてないよ！俺がびつくりしたただけだよ！

「結局全員集まったな」

「これじゃいつもと変わらないですね」

「いいじゃんみんないるんだから！」

「ふふ、やっぱりこの六人だといつも楽しいわね」

「わ、私はリゼ先輩が居るところならどこでも・・・！」

そんな感じでガールズトークがまた繰り広げられていた

会話を聞く限り俺はみんなの中に入ってるっぽい。ハブられてなくて良かった・・・

少しホツとしていると後ろから勇姉が話しかけてきた

「へえ、モテモテじゃないイズミ」

「みんなとはそういうのじゃないから、勇姉」

誰ともフラグ建ってないから。ね？

「随分と楽しそうにしてるじゃない。前よりも」

「まあね。それなりに」

少なくとも彼女達といると毎日楽しいかな

「・・・安心したわ、良かったね。イズミ」

「ん、何て言った？声小さくて聞こえなかったけど」

「なんでもない。コーヒーが美味しいって言ったの」

勇姉はそう言って明日のモデルの仕事の準備しなきゃ、と自分の部屋のある二階へ上

がっつていった

「……あのコーヒーインスタントだけどな……」

淹れ手が違うと味が変わるのかもな

コーヒー飲み過ぎてしまった……

と言うわけでちよつと買い出しに出かけていました

インスタントを二袋ほど買い帰宅中

「眠れなくなると嫌だし俺はもう控えようかな」

俺は家のドアを開けみんなの元へ……

「みんなー、ただいまー……あ？」

思わず気の抜けた声が出てしまった。なぜなら、

三人の金髪少女に囲まれ興奮するこけし

瓜二つのツインテールの少女二人を見比べ、どっちがどっちか困惑する少女達

混沌とした光景が目の前に広がっていたからだ

いやどうしてこうなった

呆然としていた俺に千夜が一言

「最高ね♪」

「どこから辺が!？」

第二十二話 ゴールデンラビッツ

黄金のオーラが眩しい。

日常生活では普通こんな感想は起きてこない。

眩しいなんて感想が起こるのは反射した太陽光が目に入った時か直視できないほど素晴らしい物を見た時ぐらいだろう。しかもそこに「黄金のオーラ」なんて主語はつかない

しかし、俺は今それを目の当たりにした

ツインテールで可愛く纏められた金髪、カールのかかったショートのカール、さらさらとしたストレートの金髪

三種盛り合わせの美しさからは気品ある輝き、「黄金のオーラ」を放っていた。

金髪トライアングルを見た俺は、一瞬で心を奪われていた

俺は無意識に手を組み、片膝をついて祈るような姿勢でこう呟いた

心からの笑顔で

「天使様が降臨なさった……！」

「「イズミ!?!」」

三人は若干引いていた

というわけで三人の金髪少女がシノをトライアングルのように囲んでいる

「はあ、はあ、天国です……！」

こけしがもうそろそろ本当に召されそうです

「カレン、私たちなんでこんな事やってるの?」

「ブロンドヘアーが三人ナノデ、シノに贅沢な使い方させて見たかったデス！」

「なんで私まで……」

アリスとシャロは呆れた顔をしていた。

どうやらカレンが思いついた茶番につき合わされてるらしい

「シノ、カレン。二人が微妙な表情になってるからそれくらいにしておけ」

「・・・そうですね、充分堪能しましたし」

そう言った忍はムフーツと満足げな様子だった。

かなりの時間楽しんだらしい、ちくしょう…

仕返しとばかりにこう言った

「次俺の番ね！」

「あつ、ずるいですよイズミくん！」

他愛のない小競り合いが続いている間、アリスとシャロはソファアでぐでーとしてた

「ううう・・・負けた」

「今回は私の勝ちですねイズミくん。金髪トライアングル権は私が貰いますよ」

「そんな権利ないわよ！」

小指相撲（第九話参照）の果てに勝利し、勝ち誇っている忍にツツコミを入れるシャ

ロ

「はあ、イズミのお友達も大概ね。疲れるわ」

「そ、そうか。まあご苦労さん」

「特にカレン。私の手には負えないわ。ココアとは別種の元気少女ね」

「まあ否定はしない」

「少し休んでスッキリしてくるわ」

「おう、ゆつくりしろよ」

俺の言葉を背に受け、シャロはさっきの金髪二人の方へ戻った

アリスとカレンは今しがたチノちゃんが淹れたコーヒを飲んでい
る
シャロもそこに混ざって・・・いやちよつと待つて

「キーンパーティーイー！」

案の定、コーヒを飲^キみ^メまし^タた

休むんじやなかったのん？

「カレン！アリスー！二人共超カワイイー！！」

「ありがとうデース！シャロもとってもキュートデスヨ！」

「か、可愛いだなんてそんな・・・」

シヤロの突然なハイテンションな発言にカレンはノリノリで、アリスは少し照れながら返す

当の彼女は二人の反応が嬉しいのか二人に抱きついてる。 眼福眼福

「シヤロはコーヒー飲むとこんな風にハイテンションになるんだ。だから」

「イズミーー!」「うわっ?!」

二人に説明している途中でまたシヤロにど突かれてしまった。ドテツと俺は倒れる
「痛ててて、びっくりしたあ」

「イズミーイズミー♪」

床に打った体の部分をさすっていると、シヤロが俺にくっついてきた。

態勢的にはかなり密着している

なんか顔近いし体温伝わってくるし金髪は輝いてるしちよつと色々ヤバイ

「シヤロ! とりあえず一旦離れよう、このままはずいから」

「・・・びし・・・たのよ・・・」

「え？」

「・・・寂しかったのよ・・・急に居なくなるから・・・」

消えているような弱い声でそう言われた

ハイテンションだったシャロの声が急にか細くなつて驚いた。

しまったな、とも同時に思った

木組みの街を離れるのは数日の事だから別に話さなくてもいいと勝手に思っていたが、それは違った

木組みの街の生活が楽しかったのは俺だけじゃなくてシャロやココア達もだったのかも知れない

だとしたら、今回の俺の行動は反省しなくっちゃな

「寂しい思いをさせて悪かった。もう勝手にどっか行ったりなんてしないから」

「くー・・・」

「あれ、寝てる？」

謝りながらシャロの方を見ると、シャロは寝息を立てていた。え、うつそだろおい
なんと間の悪い事に今の謝りが伝わったどうかすら分からない感じになつてる

せつかく・・・良い雰囲気だったのに・・・

あと我に返って気づいた

アリスとカレンは今の一部始終をバツチリ見ていて少し顔を赤くしている
後ろをむけば千夜がバツチリケータイのカメラで録画している

・・・チクシヨウ！絶対ネタにされる！ゆっくり寝ろよシャロ！

シャロをソファに寝かせた後、俺はケータイを奪うべく千夜を追いかけた

「バツチリ聞いたわよ、もう・・・／＼／＼」

そんな小さな眩きは彼女だけにしか聞こえなかった

「イズミーン！リゼちゃんが二人いるよ〜」

「綾!?どっちが本物の綾なんだ!?!」

ココアと陽子の慌てた声が聞こえる。

手にはしっかりとコーヒーの入った紙コップが持たれていた

ココア、チノちゃん、リゼのラビットハウスのいつもの面子と綾、陽子が固まって話していた。

と思うのだがお互いにどっちがどっちか分からなくなってるっぽい。え、普通にヤバくね

「いやいやいやいや、いくら何でもそんなまさか・・・」

言われてみると確かに。パツと見じゃ区別がつかん。しかし、じーつと見て当ててるようじゃ二人に対して失礼だろう。

「よし、じゃあちよつと二人「あー」って言ってみてくれ」

「そうか！声ならわかるかもしれないな！」

「「あー」」

「・・・なんか、大体同じだなイズミ。私わかんない」

最初は俺の提案に乗り気だった陽子もいざ実施すると区別がつけられなかった。

声質が一緒なのかな？数年の付き合いの陽子でも分からんとか二人シンクロし過ぎじゃない？

でもなんか片方が肩をプルプル震わせながら陽子を睨んでいる。・・・綾だなあれ
陽子もそれに気づいたのか綾を指差し見事正解した

「もう酷いわ！陽子は私の事を忘れちゃったのね！」

「わ、悪かったよー。ごめんって綾」

ポカポカと陽子を叩く綾とそれを宥めつつ受ける陽子。いつもと変わらぬ光景だった

「リゼちゃんダメだよ！陽子ちゃんをいきなり叩いちや！」

「ココア!?!」

「ココアさん違います。あの人は綾さんです。リゼさんじゃないです」

おっと、未だ判別がついてない方約1名。

というわけでもう一度綾を呼びリゼと並べる

「さあ問題、リゼはどっちでしょう？」

「イズミさん、何だかクイズ番組みたいになってます」

「まあそう言わずチノちゃんも一緒に考えよう！」

「考えるまでもなく左がりゼさんだと分かるのですが」

今の並びはココアや俺たちからみてリゼが左で綾が右に立っている。チノちゃんは即答したがココアはまだ悩んでいるようだ。

「うーん。イズミン！50：50を使うよ！」

「二択なのでもうなってるんですがそれは」

「そうだった！どうしよ〜」

ココア数学得意だったよな？暑さでダメになったのか・・・

「ココア、思い出せ！ラビッツハウスの思い出は何だったんだ、リゼやチノちゃんとの日々を忘れてしまったのか？」

「そんな事ないよ！チノちゃんとリゼちゃんと三人でお仕事してた事は私の大切な思い出だもん！」

清々しいまでにココアは言い切った

その言葉にリゼもチノちゃんも「ココア・・・」とか「ココアさん・・・」とか言つて少し驚いた後嬉しそうな表情をしている

でも気づいて欲しい。俺ナチュラルにハブられてる事に

「千夜ちゃんやシャロちゃん、イズミンとの日々だつて忘れてないよ！」

「ココアちゃん！」

千夜も嬉しそうに微笑んだ

というか俺も覚えられてた。ココアー！ありがとー！よかつたー！

とまあ俺が心の中でびよんびよん飛び跳ねてる、略して心びよんびよんしているとココ

アは一つ案を思いついた

「そうだ！二人に質問をして、その答えからどっちがリゼちゃんか当てればいいんだよ！」

「なるほど。では一つの質問でどっちがリゼかを決めてください！」

「私の質問はこれだよ！『ご飯はあるけど冷蔵庫がほぼ空っぽ！一、二種類の食材で出来る即席の朝ごはんといえぼ？』」

「右の方！」「えーと、卵かけごはんかしら」

「左の方！」「レーションとかならご飯がなくてもいけるぞ！」

「あ、左がりゼちゃんだねイズミン」

「うん正解」

「あっさりと終わりましたね」

チノちゃんのいう通りである。めっちゃ分かりやすくコメントいらぬレベルのリゼらしい答えだった

「今週のどっちがどっちでSHOW！はこれで終了です。それではまた来週！」

「しないわよ（からな）！！」

二人のツツコミは今日一番でハモってた